

望ましい人間関係を築く力の育成をめざす学級経営

～対話的な言語活動を重視した学級活動の工夫を通して～

うるま市立勝連小学校教諭 長 義 直 美

I テーマ設定の理由

現代は、「知識基盤社会」と言われ、グローバル化の進展、また複雑な社会の変化に対応できる生きる力を身につけることが求められている。しかし、少子高齢化・都市化により地域社会における人間関係の希薄化は留まることを知らず、子どもたちの社会性を育む機会が減少している。また、情報化の進展によりインターネットやSNSなどの間接体験が膨らむ一方、人との直接的な関わりを十分に持てないまま社会へ出ていく若者も増えている。今後、ますます社会の複雑化が予想される中、子どもたちに社会性の基礎として、コミュニケーション能力や人間関係を築く力を身につけることが求められていると考える。

小学校学習指導要領の特別活動の目標に「望ましい人間関係を形成し」が示されているが、このことは、「人間関係を築く力」をつける必要性を示している。また、次期学習指導要領改訂へ向けた中央教育審議会教育課程企画特別部会における論点整理の中に、「特別活動が、よりよい人間関係に基づく学級経営の充実を図る役割としても重要である」とあり、特別活動が学級経営にとって重要な役割を担っていることがわかる。児童が将来、社会生活を営む上で必要な「人間関係」を学ぶ場として学校の果たす役割は大きい。とりわけ学級は子どもたちにとって社会そのものであり、学級における人間関係が、その後の児童一人一人の人格形成や生きる力に影響を及ぼすと考えられる。

本学級の児童は、素直で明るい子が多く活発であり、個性豊かな子が多い。また、困っている友達がいると進んで声かけをする優しい子が多く、男女協力して活動に取り組むこともできる。反面、自己中心的な行動も見られ、特に学年当初は男子同士のトラブル、女子同士の口げんかなどを訴えてくることもあり、全体的に落ち着かない雰囲気であった。そこで、「なかよしクラス」を学級目標の柱に各教科・領域等でペア・グループ学習や男女を交えての交流活動を意識して行ってきた。

学級アンケートを実施したところ、いくつかの課題が見えてきた。「自分の考えを話すことができる」「みんなの前で話すことがすき」の項目では、いずれも「いいえ」「どちらでもない」を合わせると43%に達する。「よい言葉を使っているか」では、38%の児童が「いいえ」「どちらでもない」と回答していた。「話し合いをしている時、友達と意見が合わないと話をしたくなくなる」との回答が41%あり、意見や考えを受容しながら話し合いを進めていくことにも課題が見られる。一方で、「友達の話聞くのがすき」の項目に「はい」と回答している児童が88%、「ペアやグループで楽しく話し合っているか」という項目に「はい」と回答している児童が81%と見られ、交流活動に肯定的であることがわかった。

これまでの私自身の実践を振り返ると、学級活動、道徳における言葉を意識した人間関係・集団作りに力を入れて学級経営をしてきた。どの活動もどちらかという教師主導型であり、児童の自主的・自発的な活動という点が弱かったように感じる。そこで、言語活動の充実を意識しながら、人間関係の構築が期待される学級活動においての研究を進めていきたいと考えた。特に人間関係は、言葉を中心としたコミュニケーションによって形成されることから、対話的な言語活動を重視した指導の工夫を通じた学級活動を展開させていきたいと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

学級活動において、互いのよさを認め合い、対話的な言語活動を重視した実践を通して、望ましい人間関係を築く力を育み、学級経営の充実を図る。

Ⅲ 研究仮説

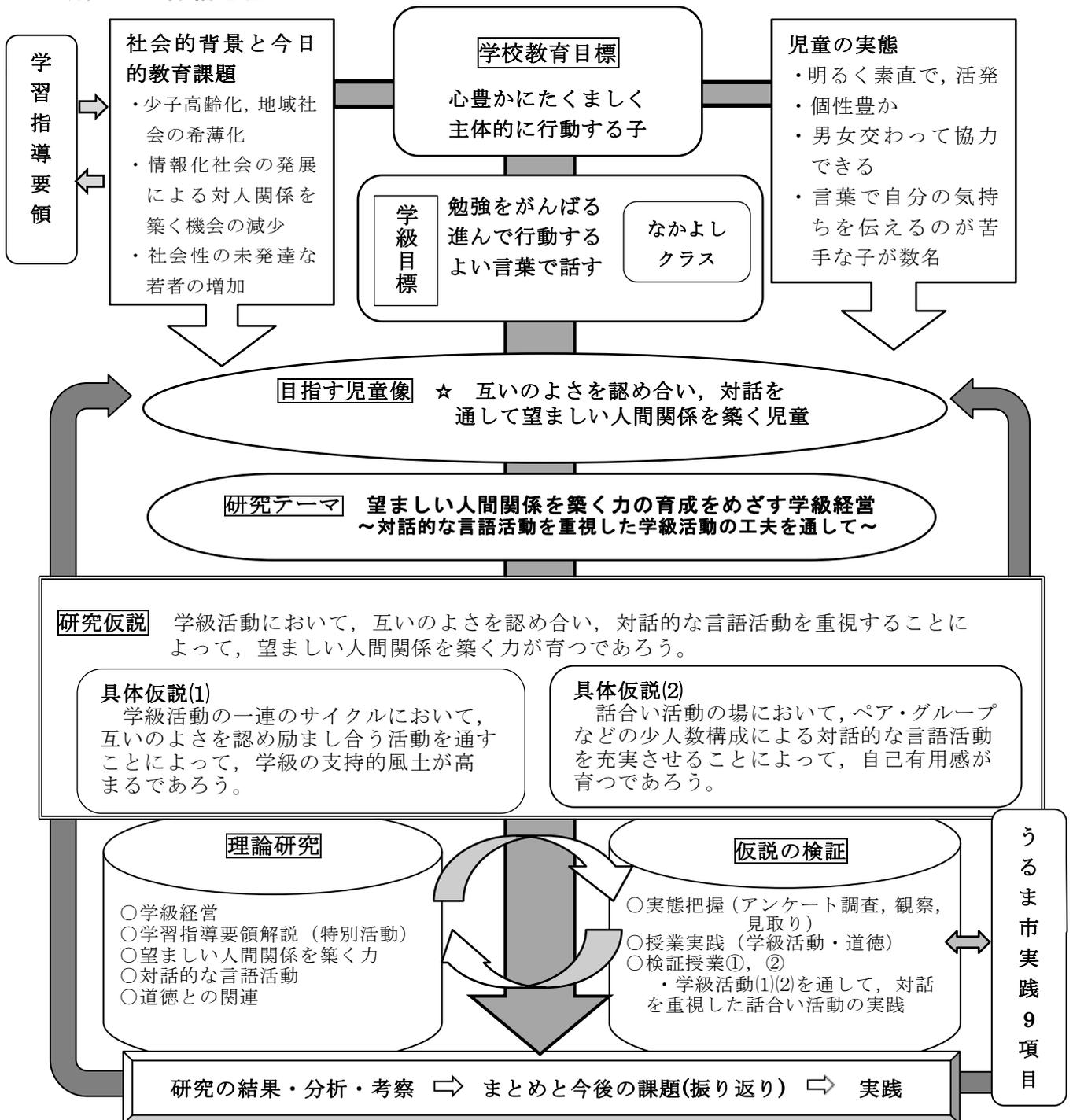
1 基本仮説

学級活動において、互いのよさを認め合い、対話的な言語活動を重視することによって、望ましい人間関係を築く力が育つであろう。

2 具体仮説

- (1) 学級活動の一連のサイクルにおいて、互いのよさを認め励まし合う活動を通すことによって、学級の支持的風土が高まるであろう。
- (2) 話し合い活動の場において、ペア・グループなどの少人数構成による対話的な言語活動を充実させることによって、自己有用感が育つであろう。

Ⅳ 研究の全体構想図



V 理論研究

1 学級経営について

(1) 学級経営の意義と内容

学級経営とは、学級を基本組織として展開される教育活動の計画、実施およびその効果の評価の過程とこれに関する学級担任のすべての職務活動を総称する。

「新学校教育全集 学級・学年経営」

また、小学校学習指導要領総則 第4の2(3)には、「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること。」とある。

学級経営の内容として、下村哲夫(1982)は、具体的活動領域を4つに分類している。

- ① 教育課程の経営：学級教育目標の設定，学級経営計画の立案，学級組織の編成，教科学習の効果的な運営，道徳指導の効果的な運営，特別活動の効果的な運営，総合学習の効果的な運営，学級教育の評価と経営の改善など。
- ② 教室経営：教室環境の構成，座席配置，学習コーナー等情報環境としての整備，掲示・展示など。
- ③ 集団経営：児童生徒理解，教師のリーダーシップ，学級の雰囲気と人間関係，学級集団づくり，教師と子どもの人間関係，生徒指導，教育相談など。
- ④ その他の経営（事務的諸活動）：保護者・PTA・地域との連携や広報，学年・学校との連絡・調整，学級事務，学級の評価

この4つの具体的活動領域の中で本研究は，③の集団経営にあたるものと考えている。集団経営の中でも学級の雰囲気，集団作り，人間関係づくりに関わる経営は，その他の学習活動，学校生活全般に及ぼす影響が大きいと捉えている。

(2) 学級経営についての基本的な考え

北村文夫(2008)は、学級経営についての基本的な考えについて、教育課程審議会(1997)から「学校は子どもたちにとって伸び伸びと過ごせる楽しい場でなければならない。その基盤として、子どもたちの好ましい人間関係や子どもたちと教師との信頼関係が確立し、学級の雰囲気も温かく、子どもたちが安心して、自分の力を発揮できるような場でなければならない。」という文言を引用して記している。

また、上記の内容は「学級経営とは何か」について基本的な考えを示していると述べている。具体的には、①安心・安定した学級づくり，②学習指導の充実，③生徒指導の推進，④教師と子ども，および子ども同士の人間関係の醸成，⑤学級集団の生産性と凝集性，その他（学級事務を含む）「学級づくり」の基本を明らかにしていると示している。

このような学級経営についての基本的な考え、「学級づくり」の基本として挙げられている具体例でも子ども同士の人間関係の形成が示されており、人間関係づくりが学級経営の基盤となることの論拠と考える。

(3) 学習指導要領解説（特別活動）

現小学校学習指導要領 第6章 特別活動において、特別活動の目標は、次のように示されている。

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

特別活動は、「望ましい集団活動」を通して行われる実践的教育活動である。この「望ましい集団活動」とは、特別活動固有のものである。この目標を受けて出された特別活動の四領域のすべての目標の中には、「望ましい人間関係を形成し」という文言が盛り込まれている。

表1 「小学校学習指導要領 第6章 第2 各活動・学校行事の目標及び内容」

〔学級活動〕	学級活動を通して、 <u>望ましい人間関係を形成し</u> 、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。
〔児童会活動〕	児童会活動を通して、 <u>望ましい人間関係を形成し</u> 、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。
〔クラブ活動〕	クラブ活動を通して、 <u>望ましい人間関係を形成し</u> 、個性の伸長を図り、集団の一員として協力してよりよいクラスづくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てる。
〔学校行事〕	学校行事を通して、 <u>望ましい人間関係を形成し</u> 、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

表1から、「望ましい人間関係を築く力」を児童に身につけさせる指導がいかに重要であるかを示していると考えられる。

小学校学習指導要領解説 特別活動編「特別活動の基本的な性格と教育的意義」によると、「特別活動は、その重要な場の機会として、学校教育において、望ましい集団活動や体験的な活動を通して、実際の社会で生きて働く社会性を身に付けるなど、児童の人間形成を図る教育活動である。」と述べているように、人間形成において、児童の人間形成を図ることを特質とする特別活動が大きな役割を担っていることがわかる。学級活動が特別活動の基盤となる教育活動であることも記されている。学校の中でも学級という社会の中で児童は、自分とは異なる個性や考え方の中で、ときには対立したり、意見がぶつかり合ったりしながら合意形成、折り合いをつけることを学び、集団の中で生きていく力を身につけていくのである。その学級という小さな社会で経験したことが、やがて、将来の児童が関わっていく大きな社会で生きていくための基盤となっていくであろう。

学級経営との関連について「第3章 第1節 学級活動 4 学級活動の内容の取扱い(3) 学級経営の充実を図る」の中で、「学級活動の指導は、学級経営と密接に関連している。学級経営の充実を図るためには、『(1) 学級や学校の生活づくり』、『(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全』を内容とする学級活動は欠かせないものである。一方、学級活動において充実した活動が展開されるためには、その土台となる日々の学級経営が必要である。」と学級経営と学級活動の深い関連性について示している。

(4) 学級経営と特別活動（学級活動）との関連

永岡順、奥田眞丈（1995）によると、「学級経営の目指すところは、学級に存在するそれぞれの個性を認め合い、クラスを構成するすべての子どもを包み込む懐の深い人間関係を育てていくことである。」と編書の中で述べている。本研究のテーマにも、学級経営をしていく上で、人間関係の形成教育が重要であり、かつ学級経営と人間関係の構築の両者は切り離せないことであると考える。人間関係という言葉を入れた。

先述した学習指導要領の総則、特別活動解説にもあるように、学級経営を充実させるためには学級集団づくり、集団活動が展開される特別活動の充実を図っていく必要があると考える。特別活動の中でも中心となる学級活動に焦点を絞って研究を進めてきた。研究を進める上で、常に「自分がどんな学級経営をしたいのか。」「そのために、何に力を入れていくのか」という問いかけをしていくことにした。

私自身が描く、「望ましい学級」とは、「児童が人と関わることに喜びを感じ、人との関わりを通して成長をしていける集団」である。そのことは、ただ単に人と交わることでなく、よりよい関わり方をすることが重要になる。つまり言い換えるとテーマにある「望ましい人間関係を築く力が育つ学級」である。学級の児童全員がそれぞれ個として、かつ集団としての可能性を伸ばす意識を高めていく、この集団に所属している喜びを感じられる学級をつくることである。

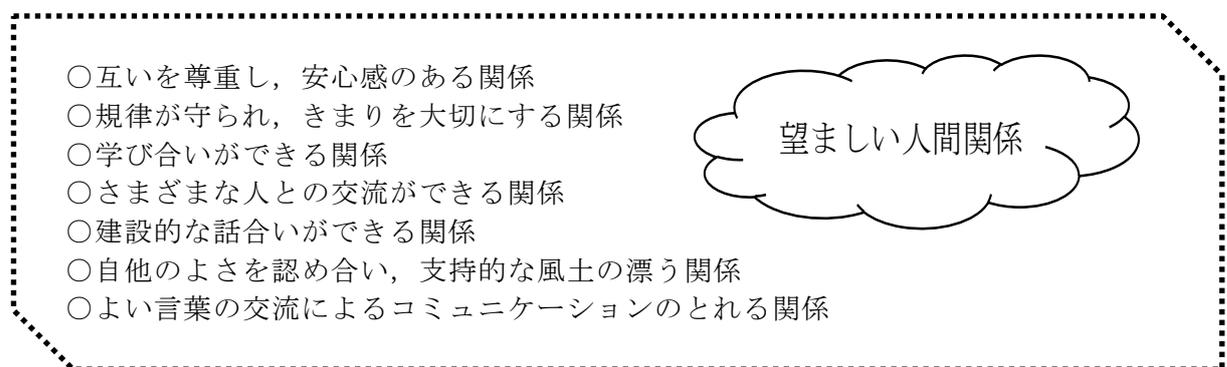
る。そのために、「集団を鍛え、互いのよさを認め合えるような学級」を目指した活動を展開させることに重点を置いた。テーマ設定理由で述べたように、「人は言葉を通してコミュニケーションを図り、人との関係を形成する」と考えることから、その方策として、学級活動における「話し合い活動の充実」、具体的には「対話的な言語活動の重視」に力を入れた指導の工夫を図っていくことにした。

2 「望ましい人間関係を築く力」について

(1) 「望ましい人間関係」とは

学習指導要領解説によると、「学級活動で育てたい『望ましい人間関係』とは、楽しく豊かな学級生活づくりのために、互いに尊重しよさを認め合えるような人間関係である。」と記されている。また、低学年では「仲良く助け合う」、中学年では「協力し合おうとする」、高学年では「信頼し支え合おうとする」人間関係の育成を重視することが明記されている。

「望ましい人間関係」については、さまざまな捉え方が考えられるが、本研究が目指す児童像を基準として私自身が考える児童に身に付けたい「望ましい人間関係」は、次の通りである。



図—1 「望ましい人間関係」のイメージ

(2) 「望ましい人間関係を築く力」とは

これまでの学習指導要領においては、学級活動の内容の一つとして、「望ましい人間関係の育成」が示されていた。現学習指導要領では、「人間関係」を重視する観点から「望ましい人間関係の形成」と改められた。杉本洋（2009）は、その理由を、「『育成』という表記では、『教師が学級や学校集団の人間関係を育てればよい。』と誤解される可能性があるからです。特別活動は、一人一人の子どもたちに『望ましい人間関係を築くことができる資質や能力を身に付けること』が目標であり内容であることを明記するために改めたのです。」と述べている。

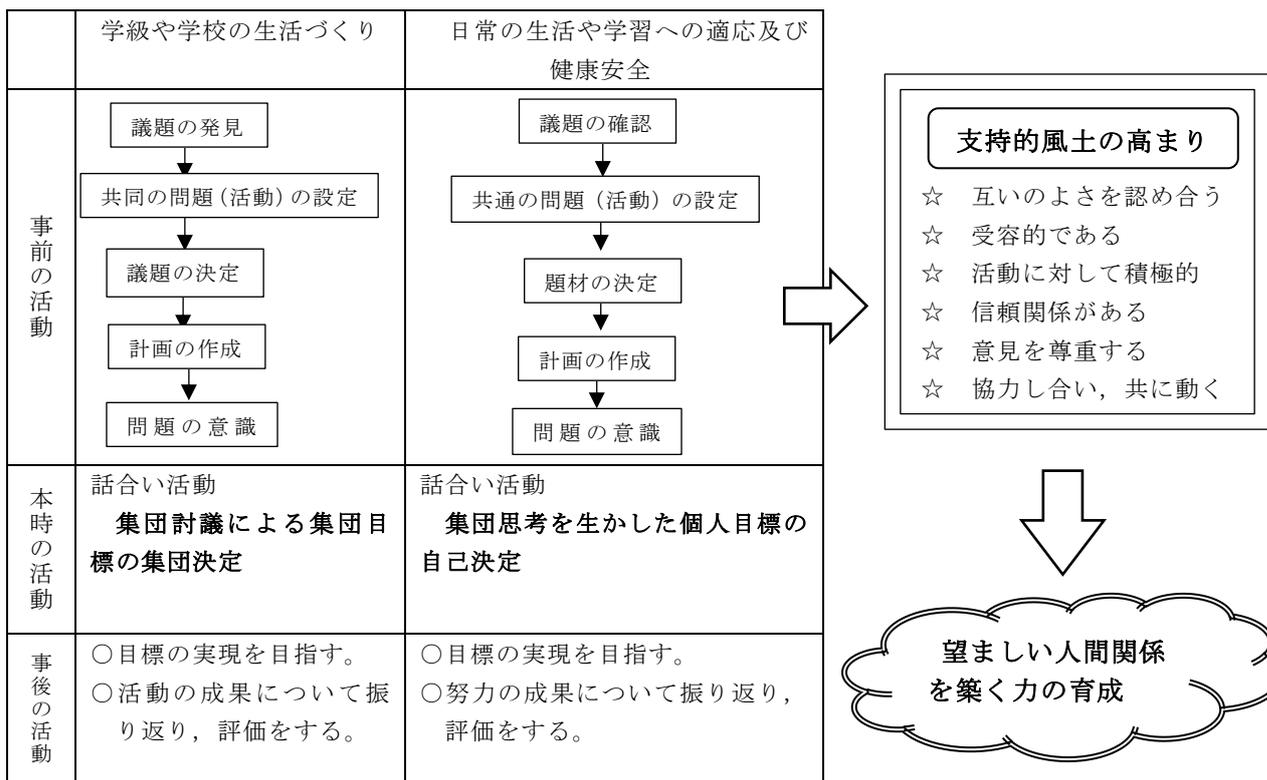
人間関係とは、期間限定ではなく、子どもたちが中学校、高校、大学、社会へ出てからも、将来家庭をもったときや地域社会との関係も含め、人が生きている間、生涯向き合うものである。ゆえに、自分自身で望ましい人間関係を築いていく力を付けさせる必要がある。また、人間関係とは個で成り立つものではなく、個と個、個と集団というように、個である自分と自分以外の他の存在があってはじめて存在するものである。

人は、人の中で育つものであり、よい人間関係を築くことは、よい人生にも繋がるといっても過言ではないであろう。学校や学級集団が、子どもたちにとって望ましいものになっていることは重要なことであると考えます。

(3) 「望ましい人間関係を築く力」と学級活動との関連

特別活動は、「なすことによって学ぶ」といわれるように、「実践」が主な活動というイメージがある。しかし、特別活動の中核をなす学級活動において、議題の選定から、計画、話し合い、実践、振り返りという一連の学習過程を通して付けたい資質・能力を身につけていくことが重要である。その一連のサイクルの中で、自他のよさを認め合い、受容的な態度で関わりをもつことによって、「支持的な風土」が高まり、それが「望ましい人間関係」へと繋がると考える。そのことを、以下のようにまとめる。

表—2 「学級や学校の生活づくり」及び「日常生活や学習への適応及び健康安全」の内容
 の特質に応じた「話し合い活動」の事前、事後等の一連の活動過程 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」



3 対話的な言語活動について

(1) 「対話」について

岩元宏輔(2016)によれば、対話とは、相互理解を目的にしたコミュニケーション、協働に向けたコミュニケーションのかたちのことである。「対話」と「会話」の違いについては、「会話は、テーマのない日常のたわいもないおしゃべりや雑談で、対話は、テーマを持った真剣な話し合いであり、テーマの有無が挙げられる。」と述べている。また、相互理解を前提とするため、「違いを認める」ことや「違う価値観を受け入れ、尊重しながら話を進めていく」ことが「対話」において重要になるという。このような性格をもつ対話は、受容的な態度や相手を尊重する態度が重視される話し合い活動の場面で取り入れていきたい方法である。

また、岩本友規(2016)は、対話を通じた想像力の向上を目指したトレーニングを推奨している。岩本氏は、論文の中で、「想像力に欠けると、コミュニケーションは成り立たない。対話は、自他の区別をつくり、想像力を育み、コミュニケーションを円滑にし、多様性のベースとなっていくのである。」と述べている。

さらに、教育課程研究会編書による『アクティブ・ラーニングを考える』に、教育について次の文が引用されている。「教育には三つの方法があると言われ、第一は知識を伝達する教育、第二は崇拜する人への敬愛や権威への追従という形でなされる教育、そして第三は、学ぶ側と教える側の知が交錯し、協働する教育である。(cf.K ヤスパース『教育とは何か』1977)。」その第三の教育の在り方が「ソクラテス的教育」とも言われ、古代ギリシャ時代にソクラテスが、対話を通して対話の相手とともに新しい知を見だし、既存の知識を教師が教えるのとは異なって、対話を通して相互に新たな知が見付け出されることを記している。

このように、対話とは、相互作用によるコミュニケーション手段であり、相互に学び合い、知識や思考を深めることを目的とする話し合い場面において有効な形態であると考えられる。

(2) 話し合い活動における「対話的な言語活動」

本研究の実践において、対話的な言語活動とは、「コミュニケーションを重視した対話による言語活動」という意味合いを含んでいる。その根拠として、学級活動における言語活動は、

各教科等で学んだ知識や技能を生かし、話し方・聞き方に気をつけながら進めていくことを前提に、自由に意見を述べ合える温かい雰囲気の中での交流を深めるものである。そのことによって、より望ましい人間関係に繋がると考えるからである。

話し合い活動において、決められたテーマに対し、個々の児童が自分の意見をはっきりと示し、真剣な姿勢で話し合いを進めさせる。話し合い場面の手立てとして、ペアやグループによる少人数という学習形態をとる。そうすることで、全員に発言の場が与えられ、互いの考えを交流し合い、また全体の場がどうしても苦手だという児童への手立てにもなると考える。その際に、特に気をつけさせたいことが「よい言葉によるコミュニケーション」である。人と話す場面において、子どもに限らず老若男女、人種の違いに関わらず人は、自分の話を共感的、肯定的な態度で聞いてくれる相手とは話が弾み、また話し合い後もその相手とよい人間関係を築ける可能性が高くなる。そして、話し合いは主に「話し言葉」を媒体としてなされるから、児童に自分が発する言葉について自覚をもって話し合いに参加する態度を身につけさせるような指導を行うことが大事であると考えられる。

「コミュニケーションを重視した対話による言語活動」については、学習指導要領の留意点等も考慮しながら展開していく。「現行学習指導要領・生きる力の第2章 言語の役割を踏まえた言語活動の充実 (2) コミュニケーションや感性・情緒に関すること」によると、コミュニケーションに関する指導を行う際の留意点を次のように示している。

- (1) 語彙を豊かに、表現力を育むこと
- (2) 自分の思いや考えを伝えようとするとともに、相手の思いや考えを理解し尊重できるようにすること
- (3) 自分の思いや考えの違いを整理しつつ、相手の話を聞き、受け止めることができるようにすること
- (4) 相手の話に対して、状況に応じて的確に反応できるようにすること

なお、コミュニケーションについては、知的活動において考えを伝え合うことも含むが、ここでは主として人間関係の構築等を目的とした活動について整理している。

文部科学省「現行学習指導要領・生きる力の第2章 言語の役割を踏まえた言語活動の充実」

図一2 「コミュニケーションに関する指導を行う際の留意点」

(3) 「対話的な言語活動」と「望ましい人間関係を築く力」との関連

本研究の具体仮説(2)において、上記のコミュニケーションに関する視点を重視した対話的な言語活動を展開させることによって、児童の「自己有用感」が育ち、テーマである「望ましい人間関係を築く力」に繋がると仮説を立てた。

「自己有用感」については、北島貞一(1995)によると、「自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるということを自分自身で認識すること」と定義されている。また『文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導リーフ』によれば、「自己有用感は、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という自分と他者(集団や社会)との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価である。自己有用感、相手の存在なしには生まれてこないもので、社会性の基礎となるものである。」と記されている。このようなことから、「個と集団の望ましい集団」を目指す学級活動において「自己有用感」を育てることは重要なことであると考えられる。自己有用感は、「対話的な言語活動」を通して自分の意見を他者から認められたり、自分の意見が集団活動の実践へと反映したりする経験により芽生え、高められ、それが「望ましい人間関係を築く力」に繋がると考える。

本研究が重視する学級活動における「対話的な言語活動」とは、具体的には、話し合い活動における決められたテーマに対してペアあるいはグループで、①考え・感想の交流、②認め・励まし合い、③相互作用的な話し合い、④よい言葉・あいさつの交流、⑤学級会個人ノートに振り返り、「友だちのいいね」交流等の言語活動を行うことである。また、その際、話す相手に体を向ける、頷く、表情、握手や拍手などの非言語的コミュニケーションも大切にさせながら活動を展開させる。

4 道徳との関連

特別活動と道徳の関連については、学習指導要領第6章の第3の1の(4)で、次のように示している。

(4) 第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、特別活動の特質に応じて適切な指導をする

また、「小学校学習指導要領解説 特別活動編」に、特別活動と道徳との関連について記述がされている。そこには、上の総則を受け、「特別活動の指導においては、その特質に応じて、道徳について適切に指導する必要があることを示すものである。」と示されている。

(1) 特別活動と道徳教育

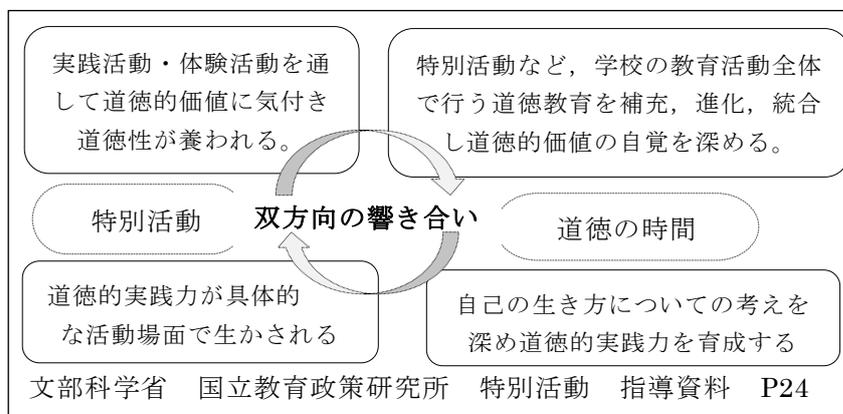
特別活動の目標との関わりについて、「この目標には、心身の調和のとれた発達と個性の伸長、自主的、実践的な態度、自己の生き方についての考え、自己を生かす能力などの道徳教育がねらいとする内容と共通している面が多く含まれており、道徳教育との結び付きは極めて深い。」と示されている。そして、上記の指導要領解説には、学級活動と道徳教育の内容の関連について、以下の表にまとめている。

表—3 「小学校学習指導要領解説 特別活動編 P57」

	学級活動の内容	道徳の内容項目（特に関連の深い）
低学年	仲良く助け合い学級を楽しくする	2 主として他の人とのかかわりに関すること。 (3) 友達と仲よくし、助け合う。 4 主として集団や社会とのかかわりに関すること。 (4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。
中学年	協力し合って楽しい学級生活をつくる	2 主として他の人とのかかわりに関すること。 (3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。 4 主として集団や社会とのかかわりに関すること。 (4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
高学年	信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくる。	2 主として他の人とのかかわりに関すること。 (3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。 (5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。 4 主として集団や社会とのかかわりに関すること。 (3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。

(2) 特別活動と道徳の時間

特別活動における集団活動や体験活動を通して道徳的実践の指導を行うことを通して道徳性を養うことをねらいとする特別活動と、学校の教育全体で行う道徳教育を補充、進化、統合し、道徳的実践力を育成することをねらいとする道徳の時間との関連を意識して指導の充実を図るという関係は右のような図にまとめられている。



図—3 「特別活動と道徳の時間との関連のイメージ」

本研究の実践においても、検証授業に関連した内容価値項目に合わせた道徳の授業を指導計画の中に盛り込み、また教育活動全般を通して道徳教育を意識して行い、道徳的実践の場としての学級活動の展開を図っていく。

VI 指導の実際・仮説の検証

1 検証授業 I (11月)

- (1) 議題「もっともとなかよしクラスになろう」(1)ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決
- (2) 議題について<省略>
- (3) 本時のねらい
クラスみんながもっとなかよく楽しい学校生活を送るための話合いにする。
- (4) 本時の工夫点

場面	工夫点(手立て・方法)	理由
話合い	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアでの話合い活動を設け、お互いの考えや意見を対話的に交流させる。 ・全員に発言の場を与える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数による対話的な言語活動により、考えの交流が活発になり、お互いのよさを認め合励まし合い、自己有用感が高まる。
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動の中で、友達のよさに気づいたことを全体場で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友達によかった点を見つけ、励ますことにより、自信を持つことができ、学級の支持的風土が高まり、今後の実践意欲につながる。

(5) 教師の指導計画

話合いの順序	指導上の留意点	目指す児童の姿と評価方法	うるま市実践9項目
1 始めの言葉 2 学級の歌 3 役員の紹介 4 議題・提案理由の確認 5 めあての確認 6 教師の話 7 話合い ①ペア活動 ②全体で発表	<ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとした声で話せるように、事前に指導する。 ・声掛けなどで、楽しい雰囲気を作る。 ・提案者の思いや考えが全員に伝わるように、また、話合いの指針となるように事前に指導をする。 ・提案理由が本時の話合いの中でも重要な指針であることを意識させる。(話の聞き方) ・前回の学級会の振り返りをし、本時の学級会で気をつけていくこと、めあての確認等をする。 ・時間を意識しながら進めさせる。 ・発表が苦手な児童もいるので、事前に自分の考えを書かせ、練習をさせ全員に発言の場を与える。 ・ペアの話合いがスムーズに進むように、期間指導をしながら助言をする。 ・友達の見解に体を傾け、受容的な態度で聞き、対話的に話合いが進むような雰囲気を作る。 	<p>【意欲・関心・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・議題に関心をもち、めあてを意識して、進んで集団活動に取り組む。 <p><観察></p>  <p>学級会を進行する司会グループ</p> <p>【知識・理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話合い活動の進め方や約束を理解している。<観察> <p>【思考・判断・実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの経験を生かし、提案理由を踏まえて、話合いの内容をよく考えて発言している。 ・友達の見解や考えを受容的な 	1. ねらいを明示した授業の実施 9. 学習習慣の確立 2. 教材・教具・説明の工夫

出し合う

<p>く ら べ 合 う</p>	<p>③ペア話合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・提案理由を意識させながら話合いを進めさせる。 ・必要に応じて、司会・記録の支援をする。 ・ネームプレートで全員の意見を表示し、確認できるようにする。 	<p>態度で聞くことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話合いの内容をよく考えながら、友達のいろんな意見に耳を傾けている。 <p><黒板ネームプレート・観察・個人ノート></p>	
<p>ま と め る</p>	<p>④全体話合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・場に合わない発言や話し合いの方向がそれてきそうなときは修正に入る。 ・できるだけ、全体の意見をまとめられるよう助言をする。 	<p>きまったことの確認</p> 	<p>6. 4. 言語環境の整備と言語活動の充実 習得したことを活用する場の設定</p>
<p>8</p>	<p>きまったことの発表</p>		<p>【思考・判断・実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話合いの中で、友達のよさを見つけ、認めて、励ますことでができ、仲良く助け合える。 <p><発表・個人ノート></p>	<p>3 板書の工夫</p>
<p>9</p>	<p>よかったこと発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の良かったところなど認め合うことのよさを実感させる。 ・同じ児童だけの賞賛に偏らないに助言・配慮する。 		<p>9. 7. 自己評価の実施 学習習慣の確立</p>
<p>10</p>	<p>教師の話</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ペア話合い活動について振り返る。 ・全体の話合いの場面で、提案理由を意識した発言や学級全体を考えた建設的な発言、意欲的に参加していた児童を褒める。 ・司会グループへのねぎらいの言葉を掛け、事後の活動への意欲が高まるように励ます。 	<p>児童が中心になって 黒板記録</p>	
<p>11</p>	<p>終わりの言葉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の課題を伝える。 		

2 仮説の検証と考察（検証授業Ⅰ）

(1) 具体仮説(1)の検証

学級活動の一連のサイクルにおいて、互いのよさを認め励まし合う活動を通すことによって、学級の支持的風土が高まるであろう。

A児は、「議題の提案」の活動で「もっとなかよしクラスにしよう」という議題を提案した。その提案理由が計画委員会で認められて、学級会では、自分の書いた提案理由を暗記して読み上げた。普段は、自分から積極的に発表することが少ないため、事前に、提案理由を教室や家庭でも練習をして学級会に臨んだ。たくさんの児童がその「Aさんの発表がすごかった。」という感想をよせていた。



議題に対する考えと理由書くA児



勇気を出して、提案理由の発表



意見が認められ、「なかよし大会」が実現し、司会の役を務めている

学級会で「なかよし大会をしたい」と発表



認め励まし合う支持的風土



発表する友だちを聞く姿勢や拍手で応援



B児は、元気でひょうきんな面があり、学級を明るく盛り上げることが出来る。本時の学級会個人ノートの自分の考え欄に、「なかよし大会」をしたいと書き、その理由を学級会の場で発表した。その意見が、他の児童らから支持を受け、決定事項として取り上げられた。事後の活動では、大会実施にいたるまで中心的な存在として活躍を見せた。

【具体仮説(1)の考察】

検証前は、学級会の言葉の意味さえ知らなかった児童たちが、「議題の提案から計画・準備、話し合い、実践、振り返りという学級活動の一連のサイクル」を通して、集団活動の自主的・実践的な態度が高まった。特に、学級会や集会の活動で、それまで知らなかった、気づけなかった友達の新たな一面に出会ってそれを認め・励ますという行為をしている児童の姿が多く見られた。そのことは、抽出児をはじめ、多くの子どもたちが感動・賞賛の言葉を「いいね！さん」で発表したり、話し合い活動で励ましたり、個人ノートの振り返りに書いていたことからわかる。友だちに認められた児童からは自分が認められた喜びの表情が溢れていた。このように、学級活動の一連のサイクルにおいて、互いを認め励まし合う体験により、学級の支持的風土が検証前に比べ高まったことは、手立てが有効であったのではないかと考える。

(2) 具体仮説(2)の検証

話し合い活動の場において、ペア・グループなどの少人数構成による対話的な言語活動を充実させることによって、自己有用感が育つであろう。

C児は、穏やかな性格である。発表したい気持ちはあるものの、グループの友達と言い合いになり、だまりこんでしまい発表ができないことが時々あった。しかし、徐々に、ペアの児童と折り合いをつけ、合意形成に向けて話し合いをするようになってきた。対話活動後の発表場面では、建設的な意見をはっきりとした声で堂々と発表していた。



学級会で自分の感想を発表。また、「なかよし大会」でグループの友達と寄り添い合っでの発表



ペアさんに見守られ、安心している様子

D児は、普段、自分から学習に向かうことができないことがある。ペアでの話し合い活動では、となりの友だちに励まされて、発表の練習をしている。自信がついたのか、自分からも手を挙げて意見を発表して、そのことを褒めると嬉しそうにしていた。



自分から挙手をして



【具体仮説(2)の考察】

具体仮説(2)では、「少人数構成による対話的な言語活動」を手立てとして「自己有用感」を育て、望ましい人間関係を築く力に繋げることをねらいとする。上記の2人の抽出児は、いずれも控えめであり、検証前は自信をもって全体の場で発言するということがほとんどなかった。今回、おたすけカードを活用し、ペアの友だちと考えを言い合い、対話をしながら言語活動を進めた結果、自分から挙手をして発表するという変容が見られた。抽出児以外にも、ペアによる話し合いを通し、ペア同士で距離を縮めている様子が見て取れた。しかし一方で、対話が弾まない、時間を持て余すというペアもあった。今後、対話活動の手立てと指導の工夫を図る必要がある。また、今回は「ペア」による言語活動を設定したが、児童の実態と様子を見ながらグループによる対話的な言語活動の実践・検証に取り組んでいく。

(3) 児童による振り返り

① 実践活動「なかよし大会」後の感想

○私はなかよし大会で一番楽しかったのは、新聞紙ゲームです。RさんやKさんがおちそうになっていたのをNさんがささえてくれました。2ばん目に楽しかったのは、わしの子ダンスです。みんなといっしょにおどれて楽しかったです。みんなといっしょになかよくしていきたいと毎日毎日そう思っています。

○私は新ぶんしゲームの時、3グループのみんなと「がんばるぞー。」とさいしょに言って、心がぼかぼかとした気持ちになれました。そのおかげでパートナーさんととってもなかよくなれました。

② 「いいね！〇〇さん」(友達によさの記述)

○Sさんは、うわばきをおく時やとる時、グループみんなにくばってそろえていたからです。自分がせいちょうしたことは、ふわふわ言葉ゲームでいい言葉をつかったことです。

○Jさんは、声の大きさをまもりながらチームワークみたいに自分のグループにも教えながらいっしょけんめいさいごまでがんばっていたからです。

○みなさんです。けんかがなくなったのは、みなさんのおかげです。ありがとう♡

3 検証授業Ⅱ(1月)

(1) 題材名「いじめをしない させない なかよしクラス」(2) ウ 望ましい人間関係の形成

(2) 題材について<省略>

(3) 指導計画

日時	領域	活動内容	指導上の留意点
1/12(木)	道徳	「いじめなんてしたくない」2-(3)	・いじめについての定義をし、しっかり認識させる。
1/13(金)	学級活動	(1) イ「係の紹介をしよう」 ・エンカウンター「心をつなげる拍手」 ・学級アンケート調査	・グループで構成した係を作り、話し合いを重視して内容等の折り合いをつけていくことを学ばせる。
1/16(月)	道徳	「あいさつっていいな」2-(1)	・ペア活動で役割演技をさせ、そのときの気持ちについて話合わせる。

1/17(火)	朝の会	・ソーシャルスキルトレーニング 「あいさつリレー」ゲーム	・「気持ちのよいあいさつ」について話し合い、体験をさせ、心地よさを味わわせる。
1/20(金)	学級活動	(2)ア 希望や目標をもって生きる態度 「自分のよさをのばそう」 「ぼくのわたしのじまん大会」	・一学期にやった「自慢大会」から、さらに自慢できることが増えた自分の成長を確認する。
1/23(月)	道徳	「おれたものさし」1-(3) ・いじめに関する新聞記事を取り上げる。	・登場人物の心情、自分の経験、友達との比較したことについてグループで対話させながら考えさせる。
1/24(火)	帰りの会	エンカウンター「友だちじまん大会①」	・同じグループの友達のよいところを相手に伝え合い、感想をシェアリングする。
1/25(水)	朝の活動 放課後	学級会個人ノートに自分の考えを書こう。 ・新聞記事の紹介	・机間指導をし、個に応じた助言をする。
1/26(木)	朝の会 帰りの会	エンカウンター「友だちじまん大会②」 エンカウンター「友だちじまん大会③」	・同じグループの友達のよいところを相手に伝え合い、感想をシェアリングする。
1/27(金)	学級活動	本時(2)ウ 望ましい人間関係の形成 「いじめをしない させない なかよシクラス」	・グループによる対話的な言語活動を重視し、めあての自己決定に繋げさせる。
1/30(月) ～ 2/3(金)	朝の会 休憩時間 帰りの会	「がんばり取り組み週間」 ・自己決定しためあての実践をする。 ・実践の評価を頑張りカードに記入し、交流し、お互いのよさを認め合う。 エンカウンター「ほめほめタイム」	・「がんばりカード」は教室掲示し、可視化させ、常に意識、友達同士で励まし合いをさせる。 ・ペア・グループだけでなく、全体の場でも頑張りを賞賛し合う場を設定し、意欲を高める。

(4) 本時のねらい

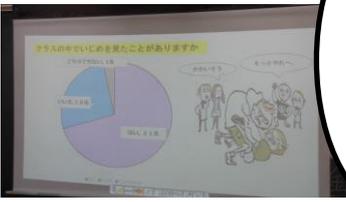
いじめに関する自分や学級の課題、その原因や解決方法などを話し合い、自分に合ったよりよいめあての自己決定ができる。

(5) 本時の工夫点

場面	工夫点(手立て・方法)	理由
導入	・実際の学級児童のアンケート調査の結果をグラフにまとめた資料を提示する。	・自分たちのアンケート調査結果による資料を見ることで、個々の児童が自分事として問題を捉え、問題の焦点化につながり、課題をつかみやすくなる。
展開	・グループ構成による対話活動で、解決方法を考える。 ・司会を中心におたすけカードをもとに話し合いを進め、出た意見をホワイトボードに書く。	・少人数による話し合いをすることにより、思考交流や深まりが増す。 ・話合って出た意見をホワイトボードに一つの言葉にまとめ黒板に貼って発表させることで、各グループの話し合い可視化ができる。

(6) 本時の展開

	児童の活動	指導上の留意点	資料・準備	目指す児童の実態と評価方法
	1 学級の歌を歌う。 2 学級アンケートの結果を	・いじめは他人事ではなく、自分たちの日常にもある	・アンケート調査をもと	・自分の日常生活でも起こりうることだという

<p>導入</p>	<p>知り、自分たちの課題をつかむ。</p> <p>3 めあての確認をする。</p> <p>つかむ</p>	<p>問題であることに気付かせる。</p> <p><うるま市実践項目 ②></p> <p><うるま市実践項目 ①></p>	<p>にしたグラフの提示 ICT の活用</p>	<p>ことに気付ける。(発言・観察)</p> <p>電子黒板で課題をつかむ</p> 
<p>「いじめをしない させない なかよしクラス」へむけて話し合って考え、自分のめあてをきめよう。</p>				
<p>展開</p>	<p>4 なぜ、いじめになってしまおうのかを話合う。</p> <p>柱1</p> <p>5 いじめのないクラスにするために何かできることを考える。</p> <p>さぐる</p> <p>見つける</p>	<p>・いじめが起きてしまう原因を探る。</p> <p><うるま市実践項目 ④></p> <p>・グループで話合うことによって、全員に発言の機会を与える。</p> <p>・お互いの考えを対話的に話合わせることで、思考を深めさせる。</p> <p>意見のまとめ方を助言</p> 	<p>・学級会個人ノート</p> <p>・ホワイトボード</p>	<p>・自分のことを進んで話し、友だちの話を最後まで 真剣な態度で聞く。(観察)</p> <p>・お互いの考えを出し合い、合意形成をしながら、円滑に話し合いをする。(ホワイトボード・観察)</p> <p>・グループでの話合ったことをまとめ、全体の場で伝え合う。(発表・観察)</p> <p>ボードを使ったグループ発表</p> 
<p>終末</p>	<p>6 自分の課題に合った「努力すべきこと」を決める。</p> <p>決める</p> <p>7 振り返りをする。</p> <p>自分に合った目標を立てる</p> 	<p>・掲示されている話合ったことも参考にして、自分に合った課題や原因に沿った個人目標を立てさせる。</p> <p><うるま市実践項目 ⑥></p> <p>・自分の努力することの発表や友だちのよさを見つけたことや授業を振り返ったこと等を自分に合った振り返りをさせる。</p> <p><うるま市実践項目 ⑦></p>	<p>・頑張りカード</p> <p>・学級会個人ノート</p>	<p>【思考・判断・実践】</p> <p>・友だちの考えも参考しながら、<u>どのように実践していくのか自分に合った具体的なめあてを考え、立てる。</u></p> <p>(がんばりカード・観察)</p> <p>・振り返りをしながら、実践への意欲を高める。(発言・振り返りカード・観察)</p>

(7) 事後の指導

児童の活動	指導上の留意点	目指す児童の姿と評価方法
<ul style="list-style-type: none"> 自分の立てためあてや取組などについて振り返る。 友達同士で取組を確認し合う。 <p>がんばった分の色ぬりをしよう</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 事後に振り返る機会を設定し、実践化に向けて継続した取組になるよう助言する。 朝の会、帰りの会などで、自他のがんばりやよさを認め励まし合わせ、実践の継続化を図るようにする。 <p>友だちが進んであいさつをしていました。</p> 	<p>【思考・判断・実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分できめたためあてをがんばりカードで振り返りをしながら、<u>継続的に進んで実践している。</u> <p><がんばりカード・観察></p>  <p>あいさつポスターをもって、休憩時間にあいさつ運動！</p>

4 仮説の検証と考察（検証授業Ⅱ）

(1) 具体仮説(1)の検証

学級活動の一連のサイクルにおいて、互いのよさを認め励まし合う活動を通すことによって、学級の支持的風土が高まるであろう。

検証授業Ⅱにおける具体仮説(1)の検証の内容を、具体的に示すと次のようになる。

場 学級活動の一連のサイクル
(学級活動(2)のサイクル ⇒ つかむ→さぐる→見つける→決める)

手立て . . . 互いのよさを認め励まし合う活動
(歌、話し合い、グループ活動、振り返り)

目指す子どもの変容 . . . 支持的風土の高まり
(声を掛け合う、話を聞く、一緒に動く、友だちの意見を認め取り入れる、拍手など)

上記の検証において、2つに視点を当てて手立ての有効性について考察する。

① 児童の活動の様子

導入 . . . 話し合いが始まる前の温かい雰囲気作りをしたいと考え、10月に児童が考えた「学級歌」を歌う場面を設けた。第1回の検証授業では歌を歌うだけであったが、今回は児童らが考えた振付を入れると、みんなが笑顔で体を一緒に動かして歌う姿が見られた。これは、学級の支持的な空気があることによって可能になったと考える。



めあて提示の前に、パワーポイントで、「シンデレラ」と「うらしまたろう」に登場するいじめの場面を見せた。続けてアンケートの結果をグラフで示すと、全員が興味を持って電子黒板を見入り、意欲を高めながら課題をつかむ様子が見られた。



展開場面・・・グループ発表の際、特に発表者の人数は指定しなかったが、ほとんどのグループが全員で前に出てきて協力していた。特に発表するのに自信なさげにためらう友だちの隣で一緒に読んであげていたり、グループ全員で声を揃えたりして発表するなど、互いに励まし合う様子が見られた。



みんなで、声をそろえよう。

せーの。

一緒に読もう。

がんばって。

しかし、発表者を決める場面で「誰にするか」「全員で出るか」で少し流れが中断し、全員の足並みが揃わなかったグループが一箇所だけあった。責め合う空気はなかったものの、グループ児童の支持的な風土を十分に高められなかったことから、指導の手立ての効果が低かったと判断する。今後、別の手立てや指導の工夫を図る必要がある。

終末・・・振り返りでは、ホワイトボードの掲示を参考にして、自己決定をスムーズに行っている様子が全体的に見られた。発表場面では、多くの児童が自分のめあてを発表し、学級全体として、実践意欲の高まりが感じられた。特に A 児は、検証前はあまり自分から発表をしなかったが、話合いの柱 1 の場面と最後のめあて発表でも自分から手を挙げて発表するという変容が見られた。



自分から進んで発表することが多くなった

② 児童の記述の様子

B 児は、引っ込み思案であり、ペアでの話合いではなかなか自分の考えなどを声にして出すことができず、以前は振り返り場面でも自分の考えや感想を書きづらそうに止まっていることが多かった。ところが、自己決定の場で、鉛筆を進んで走らせていた。さらに、同じグループの友だちの振り返りに B 児が自分からみんなに意見を言っていたことがよかったと書かれており、友だちから認められていることを実感していたのではないかと推測される。



考えや思いを書けるようになってきた

☆「今日のいいね！〇〇さん」☆

今日のいいねさんは、Yさんです。りゆうは、先生や友だちの話をよく聞いていたからです。

今日のいいねさんは、Kさんです。そのわけは、考えたことをすぐにいってはっぴょうもいっぱいしていたからです。

今日、いいねさんは、Mさんです。そのりゆうはことばがよくなっているからです。

今日のいいねさんは、Tさんです。なぜかという、「なかよしまつり」を考えてくれていたので、いいねさんは、Eさんにしました。ちがう人のいいね！もみつけてみたいです。

(2) 具体仮説(2)の検証

話合い活動の場において、ペア・グループなどの少人数構成による対話的な言語活動を充実させることによって、自己有用感が育つであろう。

具体仮説(2)の検証内容を、具体的に示すと次のようになる。

場 話し合いの場

手立て . . . 少人数構成による対話的な言語活動
(話し合いの約束, おたすけカード, ホワイトボード発表)

目指す子どもの変容 . . . 自己有用感の育ち
(めあての自己決定, よさの認め合い, 実践意欲の高まり)

上記の検証における手立ての有効性について以下の3つの視点から考察する。

① 対話的な言語活動

グループによる話し合い活動の場面では、話し合いが始まる前に「話し合いの約束」を読み上げ、確認した。これは、話し合い活動をしていく中で、これまで何度か言い争ったり、話が進まなかったりすることがあった。そこで、合意形成を図るための話し合いの約束について児童と話し合ったことをもとに手立てとして「話し合いの5つのハート」を用いた。本時では、グループ対話活動の前に、この約束を確認したことによって、決められた時間内での話し合いが出来ていた。このことから、対話活動への手立てとして有効であったと判断する。

グループの話し合いの際、話し合いの進め方の進行役の児童への手立てとして「おたすけカード」を用意した。話し合いのリーダー児童は、教師の方で意図的に指名した。その理由は、自分からは積極的にできない児童の可能性を引き出し、リーダーとしての役割を与えることで、他の児童への波及効果、また全員に話し合いに参加する機会を与えたかったからである。

C児は、話し合いのリーダーになって喜んでしたが、少し不安な様子であった。しかし、「おたすけカード」を真剣に読み、それを参考にして、たどたどしくはあったがグループの友だちに助けをもらいながら話し合いを進めることが出来ていた。このように話し合いの支援方法として手順をカードにして活用させた。「おたすけカード」があることで、安心して話し合いをリードできるようになったことが、グループ対話活動のスムーズな進行に至ったことから有効であったと捉えてよいのではないかと考える。



話し合い5つのハート

- ♡ ふわふわ言葉
- ♡ 体をむけて、聞く話す
- ♡ あい手をみとめる
- ♡ はく手をおくる
- ♡ ゆずり合い・いけんを合わせる

話し合いを進める前に、「おたすけカード」で手順を確か



話し合ったことをホワイトボードにまとめる



話し合い活動の手立てに効果的であったのは、ホワイトボードによる意見の可視化である。グループの発表を耳で聞くだけでは聞き逃しをしてしまったり、後で振り返りができない場合があるが、発表の際も意見を目で確認することもでき、ホワイトボードに文字を書く作業を楽しむ様子が見られ、また聞く側にもわかりやすかったようである。A児は、リーダーに指名された当初は嬉しいというより戸惑いの表情であった。しかし、活動を何度か繰り返す中で、積極的な動きが出来るように変化し、ホワイトボードの扱いにも慣れて、迷わずにグループのまとめを書いていた。そのことも、A児の発表意欲に繋がっている要因と思われる。

さらに、グループ活動を通して、お互いの意見を聞き入れ、いくつかの意見をまとめるという作業を行う中で、合意形成の仕方を学んだことがお互いの自己肯定感、自己有用感を育てたのではないかと考える。先の具体仮説(1)の考察でも記したが、そのことは、終末の自己決定の場の児童のめあてを書く様子や活発な発表の様子を根拠としている。

D児は、学級当初全体場で声を出さなかった。D児には、授業を通してノートの振り返りを全体場で誉めるなどの認める場を意識的に設けた。小さな声ではあったが徐々に発表もできるようになり、現在では、グループをリードし、友だちを支援することが自然に出来るようになった。



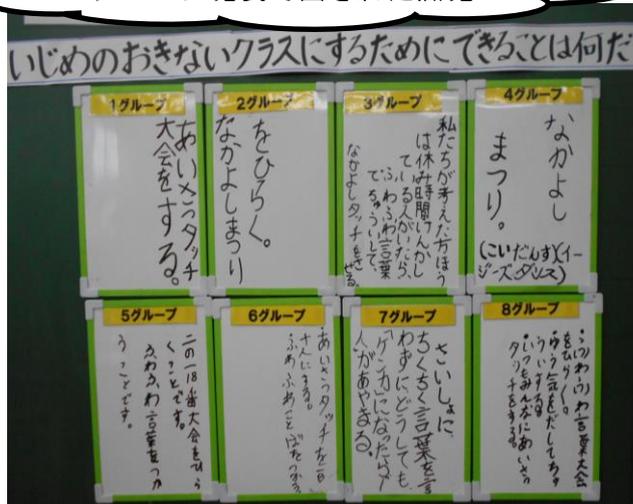
グループの意見をまとめ → 協力して発表の練習 → 友達の役割を確かめ → 発表をリード

このように、対話的な言語活動を通して友達と意見を交わし、自分の意見を認めてもらう、そしてそれが全体に反映されるという体験は、児童らに大きな自信とその後の意欲に大きな効果をもたらすと考える。その過程で大事にしていくのは、よい言葉遣いを意識させた指導を重視していくことである。そして、言葉を大切にしたら友だちとの関わりから得た自己有用感の芽生え・育ちは、テーマである望ましい人間関係を築く力の原動力になりうると考える。

② 児童の記述

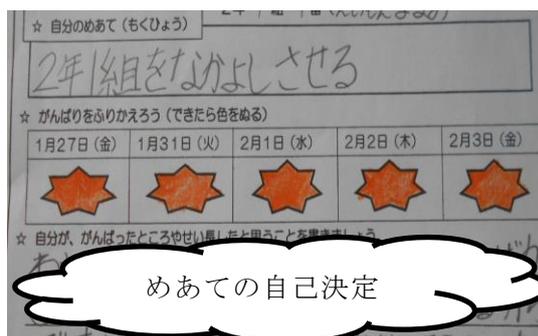
グループ対話活動で、「いじめのおきないクラスにするためにできること」をテーマに話合った。ホワイトボードを使った発表では、いろいろな意見が出揃った。「なかよしまつりをひらく」や「あいさつ大会」は2学期に集会活動の「なかよし大会」をしたことから思いついたと考えられる。また、「なかよしタッチ大会」「けんかをしている友だちがいたらふわふわ言葉でちゅういする」「けんかになったら先にあやまる」「2の1 18番大会をする」「ゆう気を出してちゅういする」など、どれもこれまでの活動を想起して児童なりに工夫して考えることができるようになったといえるだろう。

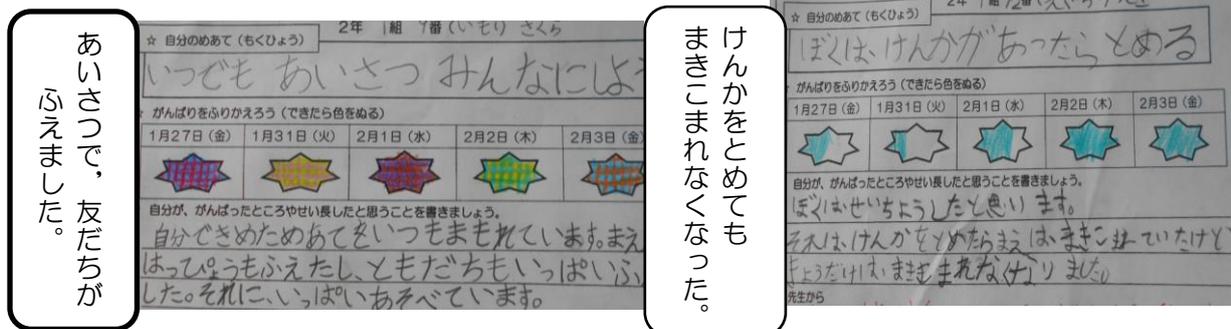
グループ発表で出された意見



さらに、自己決定の「がんばりカード」に帰りの会に、色塗りをしながら日々振り返りをし、お互いの頑張りを認め合う活動をすることで、実践意欲を高めていった。児童には、グループの発表を参考にしながら考えた自分のめあてを確認し、意識して取り組むことを促した。

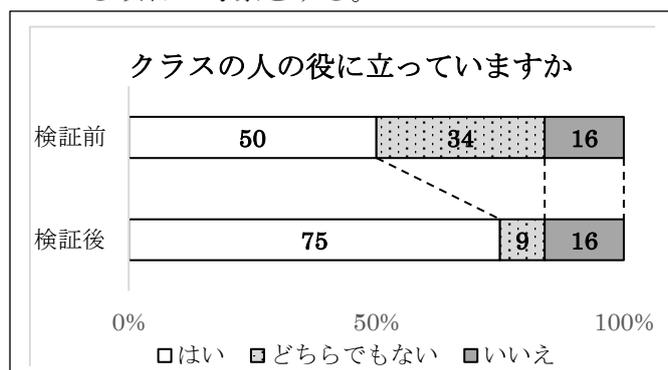
左の「がんばりカード」を書いた抽出E児は、友だち関係で相談をしていくことが度々あった。しかし、最近では、友だちと楽しく遊んでいるという話をするようになっていく。また、話し合い活動で、以前は気持ちの折り合いをつけることが難しい様子で途中言い合いになって話し合いが中断することがあった。今回の授業では、とてもスムーズに合意形成を図る姿が見えた。グループの発表もまとまっており、満足そうな表情をしていた。





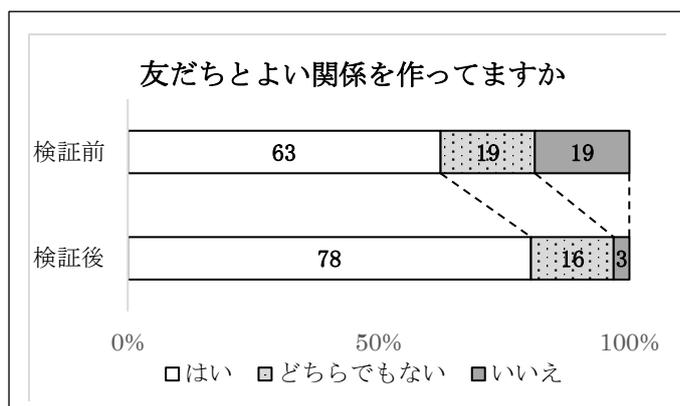
③ アンケート調査による分析

学級アンケートは、研究テーマ、検証授業の内容等によってアンケートの内容項目を設定してきた。研究テーマに関連している「自己有用感」「人間関係」「よい言葉の交流」に関する項目の考察をする。



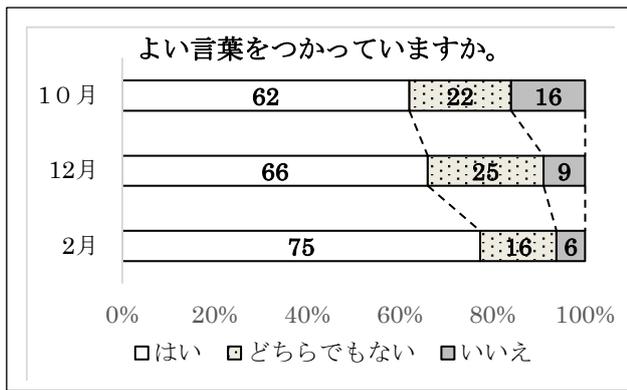
図—4 質問項目：自己有用感

具体仮説(2)の中の自己有用感について、検証授業Ⅱの前(1月)にアンケート調査したところ、「クラスの人役に立っていますか。」という質問に「はい」と答えたのは半数であった。その理由を尋ねると、「役に立っていると言ったらじまんみたいで言いにくい」や「自分では役に立っているのかわからない」「役に立とうという気持ちが弱い。」という理由を挙げていた。「役に立つ」という言葉そのものを理解してないところもあり、意味を説明した。そこで、「では、何をしたら役に立つと思いますか。」と質問をしたら、「勉強を教えてあげる。」「発表をする。」「じまん大会をする」「勇気を出す。」「進んで行動をする。」などの他に「いじめをなくす」という検証授業に繋がる意見も挙がっていた。検証授業後には、「はい」が75%になった。ただ、「いいえ」に関しては数値の変化がなかった。「役に立つ」という感覚がまだはっきりとしていない児童もいると思われる。普段のあいさつ、良い言葉、きまりを守ること等、当たり前前の簡単なことも役に立っているんだという認識を含め、児童に自信を持たせるような取り組みの実践、指導の工夫を図る必要がある。



図—5 質問項目：よい人間関係

研究テーマにある「望ましい人間関係」について、上記と同じ時期に質問をしたところ「はい」が63%であった。検証授業Ⅰの学級会の後の集会や言葉の継続指導を1学期から行ってきていることもあり、数値は上昇傾向にある。検証後には、「はい」が78%になり、「いいえ」が3%になった。しかし、「どちらでもない」「いいえ」の児童がいるという課題も認識していく必要がある。児童が学級で「よい人間関係」を築いていくことは学校生活を楽しむための必須条件であると考え、「はい」と答えられない児童は学級生活に満足していないかもしれないという視点を持ち、個別・全体への対応、支援・指導の在り方を考え、工夫・改善に努めていく必要がある。また、低学年という実態から「望ましい人間関係」という言葉を「友だちとのよい関係」という言葉に噛み砕いて話してきた。具体的には、何をもって「よい関係なのか」、児童には「よい言葉の交流ができる」や「たくさん話合いをする」等の活動を重視することで「望ましい関係」に繋がると伝えてきた。しかし、イメージを湧かせる点がまだ弱かったように感じる。学年の発達段階に応じてアンケートの質問項目だけでなく、児童への意識付け、児童の様子の見取り・観察も重視していく。



図一六 質問項目：よい言葉の交流

アンケートによる考察の3つ目は「よい言葉の交流」である。よい言葉を意識して言語活動を行うことが検証前よりできるようになった。児童らのよい言葉遣いの変化として顕著なのが、普段から友達の名前にさん付けをして呼ぶことやあいさつである。よい言葉に関しては、検証授業Ⅰで取り組んだ「2の1ふわふわ言葉ポスター」や一学期に話し合い児童から出た「教室にあふれさせたい言葉」の掲示で意識付けをしてきた。このようなよい言葉の交流を通して、友だちとのよい関係に繋げることに気付いた児童が増えてきた。

Ⅶ 研究の成果，課題・対応策

1 成果

- (1) 学級活動の内容(1)(2)の一連のサイクルを通して、お互いを認め合い、支持的な風土が高まり、よりよい学級生活へ向けた児童らによる「ふわふわ言葉の増加」「学級の合言葉を考える」「歌を作る」「集会を計画する」等の自主的・実践的な態度が育ってきた。
- (2) 話し合い活動において、ペア・グループによる対話的な言語活動の場面で、学級会個人ノートの活用、話し合いの約束やおたすけカード、ホワイトボードなどの手立てを活用しながら、グループの友だちとの対話が検証前に比べ活発になり、意見の交流や合意形成に向けての話し合いができるようになってきた。

2 課題・対応策

- (1) 学級児童の全員が学級の中で自分からよい関係を築けていけているわけではなく、少数ではあるが自分を上手く表現できずにいる児童がいる。今後も学級の支持的風土が高まり、自己有用感が育つような児童の自主的・実践的な活動を促し、望ましい人間関係形成に向けて指導の工夫・改善に努める。
- (2) 本学級には、みんなの前で話すのを苦手とし、内気で引っ込み思案の児童が少なくない。そこで、必ずしも全員発表を目指すのではなく、その児童なりの表現方法で少しでも話し合いに参加したいという気持ちを育てることに重点を置いてきた。いろいろな個性を認め、励ますような手立てについて、今後は教師だけでなく児童にも見つけ考えてくような働きかけを行い、学習に関する課題等、話し合い活動の内容の充実を目指していく。

〈参考・引用文献〉

- 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター
平成28年5月 「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」
教育課程研究会編著 2016 『アクティブ・ラーニング』を考える 東洋館出版
文部省教科担当主事連絡協議会概要 2016 小学校特別活動部会
文部科学省 中央教育審議会 2016 特別活動ワーキンググループ 審議のまとめ
岩本友規 2016 「対話で育む友人関係と多様性社会」児童心理 5月
岩元宏輔 2016 「対話によるコミュニケーション」講話資料
文部科学省 平成27年3月一部改訂 小学校学習指導要領
文部科学省 国立教育研究所 HP 平成27年 「生徒指導リーフ」
杉本 洋著 2013 「自分を鍛え、集団を創る！ 特別活動の教育技術」小学館
杉本 洋著 2009 「よりよい人間関係を築く特別活動」図書文化
文部科学省 平成20年8月 小学校学習指導要領解説 特別活動編 東洋館出版
北村 文夫 2008 「学級経営とはどのようなものか」『学級経営読本』教育開発研究所
「新学校教育全集 22 学級・学年経営」1995 ぎょうせい
北島貞一著 1995 「自己有用感 一生きる力の核」田研出版
「現代教育大事典①」1993 ぎょうせい